

2015年度特別研究期間 研究成果概要

所属・職・氏名： 文学部・教授・成田静香

研究課題：唐詩における食

研究期間：2015年4月1日～2016年3月31日

研究成果概要（日本文（全角）の場合は2,000字程度）

研究費によって四庫全書のデータベースを購入し、それを用いて、唐詩における食にまつわる表現を集め考察した。酒は別として、日々の食事が、詩の中にうたいこまれるようになるのは、中国詩の歴史において、それほど早いことではない。また飢えを嘆く等ではなく、食の楽しみをうたうのは、唐代に始まる。その重要な担い手は白居易である。そこで2015年度特別研究期間には、白居易が、詩の中に「食の楽しみ」をいかに持ち込み、それを展開させていったかを考察した。

澤崎久和は、食に関する満足の意を示す「飽」に着目し、白居易が文学の因習から離れ、新しい表現を作り出していったことを明らかにする。それによれば、三十代半ばまでの作には飽食に係る用例がなく、翰林学士および左拾遺を務めた三十代後半から四十代初めにかけては儒家的な考えに従って「飽」が否定的に用いられる。しかし四十四歳の江州左遷を境にして肯定的な用法に転じ、五十代後半以降は飽食を肯定的に詠うものが大半を占めるようになり、精神の豊かさを表現するために口腹を始めとする身体の状態を描く手法が、白居易によって選り取られ、「飽」の価値を変えていったとする。

さらに白居易と親交があった裴度に類似する用例があることを挙げ、白居易の用例が同時代において孤立するものではなく、中唐という時代にある程度の共感者を有する、一つの新しい流れであったことを証明する。そして、これが通時的に見れば、皮日休・陸龜蒙や宋の蘇軾へとつながるものであり、食をうたい飽食を謳歌し、そこに身体と精神との親密な関わりを認める系譜があることを指摘する。

宋代へとつながる系譜について異議を唱えるものではないが、白詩の変遷については、やや疑念がある。澤崎氏は左遷地江州へ向かう船旅をうたう「舟行」（花房英樹『白氏文集の批判的研究』朋友書店、1974年再版「綜合作品表」による番号0274、以下同じ）を、飽食への評価が変わった転換点とみるが、「飽」に一定の評価を与える詩は江州左遷以前にすでにある。三十代後半、左拾遺・翰林学士の時代、妻に贈る詩の中で「…人生れて未だ死せざる間、其身を忘るる能はず。須ふる所の者は衣食、飽と温とに過ぎず。蔬食も飢を充すに足る、何ぞ必ずしも膏粱のみならん……」（「内に贈る」0032）とうたっている。粗食をよしとするものではあるが、生きていく上で衣食は基本だということを明確に述べ、空腹を満たすという意味での「飽」に一定の評価を与えている。

また澤崎氏は、江州左遷以後、詩の中に具体的な食物名をうたい込むことが増えるとするが、具体的な食物名を用いた表現は左拾遺・翰林学士の時代の詩にも見られる。それは澤崎氏が「飽」を否定的に用いる例として挙げる新樂府「鹽商婦」0162である。「…何ぞ況んや江頭魚米賤く、紅鱸黄橙香稻の飯、飽食濃粧して柵樓に倚り、両朶の紅顛花綻びんと欲するをや…」引用第二句は食べ物を列挙するだけでありながら、刺身の新鮮さや、ご飯の湯気が立ち上る様が目に浮

かぶ。そしてうまいものを腹いっぱい食べた女の上気した様子が描き出される。もちろんこれは風刺の目的をもって描かれたものであるが、食べ物を具体的かつ魅力的に描く手法はここですでに用いられている。

これらと江州左遷後の詩を対比するならば、江州左遷後の大きな変化は、「飽」の位置付けではなく、むしろ詩の中に「食の楽しみ」を持ち込んだことにある。江州左遷以前、「鹽商婦」0162には食べ物を具体的かつ魅力的に描く表現が見られるが、自分自身の食事については、具体的な食べ物を示さず、「内に贈る」0032のように、空腹を満たすための粗食があるとうたうものしか見られない。ところが「舟行」0274では「…船頭行竈有り、稻を炊ぎて紅鯉を煮る、飽食起ちて婆娑、盥漱す秋江の水…」と、食べ物とその調理法を具体的に示し、食の楽しみをうたう。食について空腹を満たすこと以上の価値をうたうことは、おそらくこの「舟行」0274から始まる。そして食の楽しみという題材を見出した白居易は、これ以後さらに積極的に「筍を食す」0299、「葵を煮る」0308のような詩を作り始めるのである。

以上のように、白居易が、詩の中に「食の楽しみ」をいかに持ち込み、それを展開させていったかを考察した。

研究成果概要は、データは gakunai@kwansei.ac.jp まで提出してください。